

実験操作が虚偽認知に与える影響の検討

— 真実デフォルト理論に着目して —

○伊藤洋輔・森永康子

(広島大学大学院教育学研究科)

問題

従来の虚偽検出に関する実験には、いくつかの問題があることが指摘されている。例えば、Levine (2014) は、真実デフォルト理論の中で、実験の中に“虚偽のプライム”があることが結果に影響を及ぼしていると指摘している。

真実デフォルト理論(Truth-Default Theory: TDT)とは、McCornack & Parks (1986) の“真実バイアス理論”をベースにした、虚偽と虚偽検出に関する理論である。真実デフォルト理論では、人は基本的には(デフォルトでは)他者を信じる傾向にある(真実バイアス)が、同時に他者が必要に応じて嘘をつくことも知っているため、嘘をつく理由(ここではトリガーイベントという)があることを知れば、真実デフォルトが放棄されるとしている。トリガーイベントには以下の5つがある。それは、1.計画された動機。2.不誠実な態度と関連した行動の呈示。3.メッセージ内容の一貫性のなさ。4.コミュニケーション内容と既知知識との不一致。5.第三者からの警告、である。

従来の虚偽検出実験では刺激提示前に“誰が嘘をついているか判断してください”という内容の教示を行っており、これは上述の“第三者からの警告”とみなすことができる。これによって真実デフォルト状態ではなくなり、結果として、虚偽検出実験の正確性が歪められた可能性がある。

そこで、本研究では“嘘がある(誰が嘘をついているか判断してください)”という教示の有無が実験結果に及ぼす影響について検討する。本研究でも、虚偽判断課題は行うものの、嘘の教示を動画視聴の前か後で行う。動画視聴の後で嘘教示を行う場合、刺激人物の印象形成の段階ではトリガーイベントに抵触していないため、嘘教示の影響の検証が可能であろう。さらに本研究では、他のトリガーイベント(動機の有無)に抵触する条件も加えて検討する。

方法

実験参加者 国立大学の学生 60 名。

実験計画 教示内容(3:提示後・動機有群, 提示後・動機無群, 提示前群)×刺激の真偽(2:真刺激, 嘘刺激; 参加者内要因)の 2 要因混合計画。“動機有群”とは『刺激人物は「うまく嘘をつけた人には謝礼が上乘

せされる』と言われている』と知らされる群であり、これは TDT における、“計画された動機”というトリガーイベントに抵触するものと考えられる。

手続き 実験室において、印象形成の実験であることを伝え、モニターによる刺激提示を行った。刺激人物 8 名のうち 4 名が本当のこと、4 名が嘘を話している動画を用いた(伊藤, 2015 が作成)。全刺激提示後、各刺激人物に対して、真偽判断を求めた。

結果

いずれの群においても、相手の言っていることを真だと判断する確率が有意に 50%より高かった。真判断割合について、3×2 の分散分析を行った結果、教示内容の主効果($F(2,57) = 3.152, p = .050, \eta_p^2 = .100$)と刺激の内容の主効果($F(2,57) = 3.758, p = .058, \eta_p^2 = .062$)が有意な傾向を示した。下位検定の結果、提示前群は 2 つの提示後群より真判断割合が高かったが、動機の有無の 2 つの群間には差が見られなかった(Figure. 1)。また、虚偽判断成功率について、3×2 の分散分析を行った結果、教示内容の主効果は見られなかった ($F(2,57) = 0.940, n.s., \eta_p^2 = .032$) が、刺激の内容の主効果が有意($F(2,57) = 48.355, p < .001, \eta_p^2 = .459$)で、交互作用も有意傾向を示した ($F(2,57) = 3.152, p = .050, \eta_p^2 = .100$)。

考察

真実バイアスの影響はどの群においても見られた。しかし、嘘教示有の 2 群は嘘教示直前群よりも真だと判断する数が少なかった。つまり、“虚偽のプライム”の提示タイミングにより、真実デフォルトの放棄が促進されたと言えよう。動機の有無が結果に違いを及ぼさなかったことについては、動機の有無はトリガーイベントとしてはそれほど重要でない可能性が考えられる。

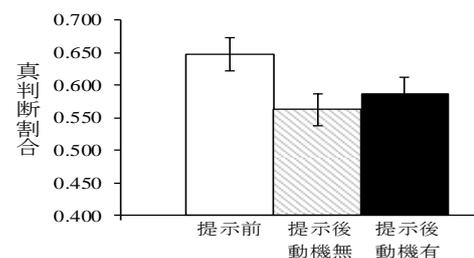


Figure 1. 教示内容が真偽判断に与える影響